

## 猫免疫不全ウイルス（FIV）感染症ワクチンが新発売！！ （猫エイズ）

猫免疫不全ウイルス感染症（FIV）は、国内をはじめ世界各国で存在が確認されています。感染猫の一部は数ヶ月から数年を経て後天性免疫不全症候群（AIDS）を発病し、AIDS確定診断の後、多くは数ヶ月の経過で死亡することが知られています。

現在、国内の猫の約10%が感染していると言われるFIV感染症に対する治療法としては、症状を緩和させる対症療法のみで、一度体内に侵入・感染したFIVを消失させる有効な治療法はありません。このような病気のため、一刻も早く有効なワクチンの開発が望まれていたのですが、この感染症に対するワクチンの開発は技術的に非常に難しく、人のエイズワクチンですら未だに開発されていないのが現実なのです。

このFIVのワクチンは日本の北里研究所で開発され、2002年より米国において発売されましたが、この度日本においても発売される事となりました。

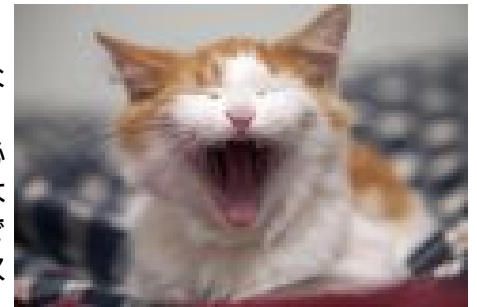
当初、米国で発売されたこのワクチンは効果の面において疑問視されていました。そのため、今回の国内で発売されたこのワクチンでは改良が加えられています。今後このワクチンの評価は国内でされていくと思われます。

では『このワクチンは全ての猫に接種した方が良いのか？』という事については、答えは『そうではありません』。猫の飼育で一番大切なことは外に出さないことです。室内のみで飼育し、ワクチンは3種の接種が望ましいと思われます。猫ちゃんが外に出れば、感染症だけでなく、交通事故やケンカなどのリスクも負うからです。またFIVワクチンを打ったといっても100%感染を予防できるものではなく、ワクチンの副作用なども考えれば必要のない（完全室内飼育で同居猫にFIVに感染した猫がいない）猫においては接種をオススメする事はありません。では、どのような猫にお勧めするかといえば、どうしても室内飼育が難しく外に出てしまう猫や、室内でFIVに感染している猫と同居しなければならない猫です。このような猫ちゃんにとっては命を守る大事なワクチンになるはずです。

このワクチンは初年度2～3週間隔で3回打つ必要があります。そして、その後は1年に1回の追加接種が必要です。また、最初に接種する時にFIVに対する感染の有無を検査しなければなりません。それは1度ワクチンを接種した猫は、院内の検査ではFIVに感染したのか？FIVワクチンを接種したための抗体なのか？判別ができなくなるからです。

FIVワクチンの費用は1回¥8,400です。初年度は3回接種のため、3回セットで¥21,000となります。これに別途検査費用が必要になるため、合計で¥26,250になります。

全ての猫に必要なワクチンではありませんので、ご自分の猫ちゃんに必要なかわからない方やもう少し詳しい話しをお聞きになりたい方は病院にご相談ください。また、現在このワクチンは品薄のため、当院での接種は5匹分のみとなります。先着順になりますので品切れの際は次回入荷までお待ちいただくこととなります。予めご了承ください。



毎年10月・11月にドッグドック&キャットドックを行っております。病気のもとを早めに見つけ、病気になる前にケアするために役立つ検査です。詳しくは同封の『検査のお知らせ』をご覧ください。お申し込みの際は裏面の問診表をご記入の上ご来院いただき、検査の内容確認、検査前の注意などのご説明と、検査のご予約を入れていただきます。ご不明な点がございましたら、お電話でも結構ですのでお問い合わせください。

## 今年もやってきます！ ドッグマンズ！！

毎年11月はドッグマンズ。犬の殺処分頭数ワースト1の福岡をなんとかしよう！というイベントです。「引越すので飼えなくなった」「病気になったので処分したい」「人を咬むので飼えない」こんな理由で処分される犬達を減らすにはどうしたら良いのか、また不幸な仔犬達を減らすにはどうしたら良いのか、みんなで考える1ヶ月です。各地でしつけなどセミナーやイベントが行われますので是非お出かけください。10月下旬にはガイドブックを待合室に置きますので、お持ち帰りください。また、この活動をたくさんの方に広めるためと、活動資金のためにステッカー購入にご協力ください。1枚500円です。

## 病気シリーズ

### 自己免疫性溶血性貧血

自己免疫性溶血性貧血（IMHA）とは何らかの原因で免疫に異常を起こし、血液中の成分の1つである赤血球に対する自己抗体が産生された結果発症する疾患です。自己抗体によって赤血球が破壊されることによって溶血がおこり貧血を発症します。すべての犬種・猫種で報告されていますが、マルチーズ、プードル、コッカースパニエルなどに多いとされています。

#### 原因

IMHAに関してはまだ不明な点が多く、明確な原因や発症機構は分かっていません。ほとんどが原因不明の特発性とされていますが、腫瘍や感染症(ウイルス・細菌など)・薬物などの影響により抗体産生に異常をきたした場合も発症が認められています。また、猫におけるIMHAでは半数以上が猫白血病ウイルス（FeLV）感染と関連があるとされています。

#### 症状

赤血球が破壊されることによって急性の貧血が起こるため、元気消失、食欲不振、呼吸速迫、ふらつき、粘膜蒼白（歯肉や舌が白っぽくなる）などの症状がみられます。その他の症状としては下痢や嘔吐などの消化器症状を示したり、発熱や発作がでる場合もあります。また一部の症例では、黄疸やヘモグロビン尿(血色素尿)が認められることもあります。数日～数週間で死亡する例も多いので早期に診断・治療する必要があります。

#### 治療

IMHAの治療は異常を起こした免疫を抑制し、赤血球の破壊を止める必要があります。異常は免疫抑制量のステロイドを使って治療を開始しますが、一部ではステロイドに反応しないケースもあります。その場合は他のタイプの免疫抑制剤や抗がん剤としても使われる強い薬が必要になる場合もあります。

## わんこ・にゃんこ日記



写真①

新聞名にもなっている『キャビちゃん(キャビア)』。受付にいるフラット・コートド・レトリバーですが、8月18日で“13歳”になりました。数年前から白髪も目立つようになり筋肉も衰え、長時間歩くと関節の痛みらしい症状も見られるようになり、“もうお婆ちゃんなんだなあ・・・”と感じる事もしばしば。最近にはさらに高齢に伴う、様々な症状が見られるようになりました。【オシッコの切れが悪い】【脚が弱り、オシッコのとき中腰になれない】【少しでも滑る床だと脚が滑ってしまい転ぶ事がある】【今まで以上に甘えん坊で、寂しがりや。留守番をしたり、あまりかまって貰えないと前肢の毛が抜けるほど舐め続ける】などなど。本人も困っていると思

いますが、一緒に暮らす人間も困る事ばかり。特にオシッコはきちんと中腰になれないためにお尻がベチョベチョ。切れが悪いため歩きながらも数滴たれます。キャビアがトイレに行くたびに、タオルを持ってそばで待機し、終わり次第お尻を拭かないと部屋中オシッコでベタベタになってしまうのです。せめてお尻がベチョベチョにならないように毛を刈ってしまおうか・・・とも考えましたが、唯一自慢のきれいな被毛を刈ってしまうのは飼主としても納得できず、考えました。・・・そして手作りでズボンを作りました(写真)。大型犬用のズボンはほとんど無く、なかなかサイズも合わないの、私の着なくなった洋服の袖部分を利用し、お尻の被毛がきれいに隠れるように作ってみました。なかなかかわいいでしょ！それから滑りやすい所ではかせる靴下。裏には滑り止めがついています(写真)。これは、既製品が合うので助かりました。今は滑りやすい後肢だけ履かせてます。そして次に前肢を舐める事を防ぐというより脱毛や舐めるための皮ふの炎症を防ぐためレッグウォーマーをその時だけ着けるようにしてます(写真)。・・・と、とにかく手がかかります。まだキャビアは自分の力で寝起きができ、自分の力で歩いてトイレに行けますが、患者さんの中には支えてあげないと立ち上がれないコや支えてないと排泄できないコ、寝たきりになってしまったコもいます。小型犬に比べ大型犬の介護は想像以上に大変です。この先のことを考えると時々自信がなくなります。『いつまでも元気で長生き』これは誰もが願う事ですが、目前となった今ではもっと強い気持ちでそう願っています。こんな手のかかるキャビちゃんですが、まだまだ受付嬢を頑張りますので皆さんよろしくお願ひします！（最近、暑くて寝てる事が多いですが、元氣バリバリです！）



写真②



写真③